

---

# **二人だけの秘密基地。 -We are replaced-**

とち

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

一人だけの秘密基地。

- We are replaced -

### 【ZINE】

Z8910A

### 【作者名】

とひ

### 【あらすじ】

今なら言える気がする。今だから言わなければいけないように思う。だから、言おうって決めた。河田くんにだけでも伝えたいこと。それを今、手紙に書いて送ります。

(前書き)

『秘密基地』をテーマに書き上げた短編小説です。  
「秘密基地小説」と検索すれば簡単に見つかるかと思います。  
みなさんの作品をどうぞお楽しみください。

私は今、机に向かっている。

何も夏休みの宿題が終わってないからとか、勉強が大好きなんですか、夏休み明けの予習中ですか言つわけじゃない。宿題はもうとつこの昔に終わらせているし、勉強はどうやらかと言つと嫌いな方だ。

私は今、一枚のルーズリーフと向き合っていた。

何の変哲のない一枚の紙切れだ。別に絵を描くのが趣味だとか、私は手書きで執筆する小説作家だとか言つつもりもない。私が描く絵なんて幼稚園の子供が描いてるみたいなラクガキにしか見えないし、小説はある文字の多さに目が痛くなつてくる。きっと私は文系には向いていないんだろうなあ。

私は今、一通の手紙を書こうとしていた。  
もともと、そのために机に向かっているし、そのためにリーズリーフの紙を持っている。

宛先は河田くんだ。

書きたい内容は決まっているんだけど、どうしても最初の言葉が出てこない。と言うよりは最初の一文が書き出せないでいる。

まあ、早い話をするなら直接言えばいいことなんだけど、今の私にこのことを直接言う勇気はこれっぽっちもない。ただ、河田くんには、河田くんだけには教えてあげなきゃいけない、私から言わなければいけないような気がしていた。

そんなことを強く思うようになつたのは、きっとこの前の二人で言い争つてたことがあつたからだと思う。とにかく、このことを伝えないと駄目になつちゃうような予感めいたものがあつたんだ。  
けど、それでも直接言つにはやっぱり抵抗があつて、こうして手紙を書くことにしたのがはじまりなのかな。

「あー、何書けばいいのかわからんないよー」

持っていたシャーペンを置いて、おもいつきつ背伸びをする。

「あー。手紙って大変、面倒、疲れるうー」

もう一時間くらいはこの調子でいると思つた。

私は本当に文系には向いていないな、これじゃあね。

「ん、あ、そうか。わかつた、わかつた」

再びシャーペンを握り、再び机に向かい直す。

そうそう。変に堅そうな言葉を使おうって思つから無理なんだよ。ここは私の言葉で、そうだな、話し言葉みたいな感じで書いていけばいいんだ。なーんだ私って頭いいじゃない。やっぱり私って文系？あ、いや、それはないか。だつて「ぱり」とか「ほたん」とか書けない漢字いっぱいあるもんね。

じやなくて、手紙書かなきゃ手紙。

「書き出し、書き出しかあ。うん、よし決めた」

拝啓、河田くん。

突然ですが、河田くんには『秘密の基地』がありますか？

子供の頃の話をしようつと思つ。

もう十年以上前かな。私も、たぶん亜美も物心が着いて間もない頃の話。いや、そんなに古くないかもしね。小学校の一年か二年生くらいの話だったかな。たぶん、私が覚えている限りで一番古い記憶。

あの頃の思い出で私が一番最初に思い出すのは必ず亜美の後姿だった。どうしてかはわからない。ただ、いつも何処にいても何をしていても思い出の中の私は亜美の後ろにいた、よつな気がした。

「真美ちゃん」

「亜美ちゃん」

「あそこ行こうか？」

「うん、行く！」

互いに互いの名前で呼び合っていたあの頃、私達は一人だけの秘密基地みたいな場所と一人だけの遊びがあった。

「とつかえっこ？」

「うん、そう。二人の持つてるものをとつかえっこするの。それで一番最初にお母さんに見つかった方が負け」

「わかった、やる！」

「じゃあ、そうだ、ランドセル交換しよう？」

「うん！」

遊び方は本当に簡単。ただ一人の持ち物を交換して家に帰つて、お母さんに最初にバレた方が負けって言うルール。負けたからといって罰ゲームがあるわけでもなく、勝つたからといって何か商品みたいのが出るわけでもない。ただそれだけのゲーム。

けど、あの頃の私達にとってそのゲームはちょっとした冒険のようなものだった。ランドセルとか筆箱とかを交換して家に帰つたら、お母さんには悟られないように普通の顔をしながら自分達の部屋へ急ぐ。たまに見つかった時もあったけど、その度にお母さんは微笑みながら頭を撫でてくれた。

結局、一人にしてみれば交換したことが見つかっても見つからなくとも正直言つてどっちでも良かつたんだと思う。

そんなことより、ただ単にお母さんにかまって欲しかつただけだつたんだと思う。

いつしか、そやつて交換して帰ることが当たり前になつて、それはもう毎日のように何かを交換しては帰つてきていた。

気が付けば、通学路の途中にある神社の裏手が物を交換する場所になつていて、そこが一人にとっての「秘密の場所」となつていた。

「今日は何を交換する？」

「うーんとね、じゃあ今日は靴ー！」

「賛成！」

年を重ねるごとに交換するものが大きくなつていた気がした。

上着だとか、傘だとか、ハーモニカだとか、理科で作ったモーター  
カーだとか、エプロンだとか、給食の白衣だとか、髪留めだとか、  
名札だとか、まあ、よく飽きもしないで続けていたなつて思つ。  
本当に感心するくらい凄い。

思えば、もう中学生も一年生の頃になつていた。

桜の花びらがひらひらと散つてゐる季節だつた。

「ねえねえ、お姉ちゃん。今田はどうするの？」

学校は昼休み。

給食が終わつて残りの時間をそれぞれが好きに過ぐしている時間。  
とある教室の一角に一人の双子が向き合つて座つてゐた。もちろん  
私達だ。

入学の時と二年生への進級の時、このどちらも一人が同じ教室だつ  
たと言うことはちょっとした奇跡かもしれない。

「亜美も好きだねえ。じゃあ、どうしようか？」

「なになにい」

妹は体を左右に揺らしながら姉が答えるのを待つてゐる。まるで子  
供そのものだ。親が用事を済ませるのを待つてゐるような子供。姉  
のしつかりとした雰囲気とはまるで逆のよう。これで双子なのか?  
つて聞き返しちゃうくらいかも、たぶん。

「よし、じゃあ今日は大胆に行ってみようか?」

「どう言ひ方と?..」

「耳貸して」

「うん」

「えつとね、午後の授業なんだけど、誰にも言わないで席を交換し

ない?」

「あー、いいかも、それ」

「でしよう。で、どうするのやつてみる?..」

「賛成!」

そして私達二人は誰にも言わずに席を交換することにした。

先生はもちろん、周りの席の人にも言わない。それで午後を過ごしとおす。それはそれでなかなか危ないものではあった。だつて双子とは言つても違う人なんだ。ただ他人じやないだけで性格とか趣味とか、そういう細かいところは全く違つてくる。そこを踏まえた上で周りの人に合わせるのはかなり大変だつた思い出がある。まあ、それでも見つかることなく午後の授業を過ごしきつたなんだけどね。

それが私の中学までの思い出。

夢と幸せに溢れていた頃の懐かしい思い出だった。

高校も一人で一緒の所に進学した。

と言つても近くの普通高校だから別に特別だつたつてこともない。この辺だと、だいたいの人がこの高校に来るらしくて、だから私達二人が同じ高校でもそれほど珍しいことじやないんだつて担任に言われたことがある。

けど、高校に入った途端にあの「とつかえっこ」遊びはやらなくなつていた。

理由は、よくわかんない。

たぶんだけど、いい年して「とつかえっこ」で遊ぶ高校生つて言う印象が急に恥ずかしくなつたからだと思つ。

二人で話し合つこともなく、その「とつかえっこ」する遊びはまるで自然消滅でもしたかのように消えてなくなつていつた。

いつしか一人の会話の中、言葉の中に「とつかえっこする?」って言う言葉が出てくることはなくなつていった。

「ねえ、亜美?」

「ん? どうしたの? 忘れ物でもしたの?」

「違うわよ。亜美に好きな人が出来たつて本当なの?」

「わ、ちょ、な、何よ急につ! 脅かさないでつたら」

「脅かしてないわよ。聞いただけじゃない」

それからしばらく経つた頃、たぶん一年生の秋だつたと思う。

私達双子にちょっとした事件が起きた。

「で？誰なのよ、教えなさいって」

「言つわけないでしょ。絶対に教えてあげません」

亜美に好きな人が出来たって言つ噂が流れた。いう言つ噂は伝わる  
のが早くて、一、二、三日でクラス全員に知れ渡つてしまつたらしく。

そのお相手は、河田誠次くん。

河田くんも亜美のことを意識していたみたいで、つまりは最初から  
両思いだつたつていうことなんだけど、程なくして付き合つて始めて  
いた。

それから双子の生活は少しずつ変わり始める事になる。

それまで一緒に帰つていたはずなのに、亜美は河田くんと帰るため  
に姉を蹴つた。休みの日もそうだ。亜美が家に居ない日が一気に増  
えていた。

そんな少しずつ動き出しあつとする新しい生活が半年くらい続いてい  
く。

高校一年生、初夏。

ちょっととした思い付きで、あの「とつかえつ」遊びが蘇つてきた。  
理由は簡単。私がつまらなかつただけなんだと思う。いつも隣に  
いたはずの亜美がいないことにちょっとだけ腹を立てたんだと思う。  
「ねえ、本当にするの？」

「するよ。だつて亜美だけするいじやん」

「何よ、それ。逆恨みつてやつ？」

「いいからいいから。はい髪留めも交換して」

「もう、よくないつてばあ」

神社の裏手。

あの小学生だつた頃の私達がよく遊んでいた場所。誰も知らない一  
人だけの場所。二人だけの秘密の場所。そう、そこは一人にとって  
の秘密基地だつたんだ。

「よーし、お着替え終了！」

「 もへ、おねえちゃん …」

「 ぶーつ！違ひでしょ？今の私はお姉ちゃんじゃありませんよ、お

姉ちゃん？」

「 ううう。じやあ氣をつけてね、あ、あ、亜美

「 うん！行つてきまーす」

「 はあ。おねえ、じやなくて亜美の馬鹿」

私達は昔みたいに「とつかえつこ」遊びをした。そして亜美になつたお姉ちゃんは機嫌良さそうに河田くんとの待ち合わせ場所へと向かつていった。

けど、お姉ちゃんは河田くんに逢うことが出来なかつた。  
そして帰つてくることも

ひき逃げだつたんだそうだ。それも信号無視。

車体に弾かれた小さな体はハメートル以上も飛ばされて地面に落ちたらしい。医者の人から聞いたら、お姉ちゃんはまだ生きていたそうだ。車に轢かれて、遠くに飛ばされても、地面に叩きつけられても、それでもお姉ちゃんはまだ生きていたらしい。

きっと痛かったに違ひない。

想像なんて出来ない痛みだつたんだ、きっと。  
あー、駄目。もうこれ以上話せそうにない。自分が事故に遭つたわけでもないのに物凄く息苦しい。痛いはずなんてないのに、体が痛い痛いって訴えてる。

もう嫌だ。逃げたい。

でも、これだけ。一つだけ言わなきゃいけないことがある。

私は大きな過ちを犯してしまつた。

私はお母さんが来たとき本当のことと言えなかつた。私が亜美で、亜美がお姉ちゃんなんだつてことを伝えることが出来なかつた。だ

つて、もう冷たいお姉ちゃんを前にして「亜美、亜美」と言いながら泣いているお母さんに「私が亜美だよ」なんて言えるわけがない。

ただ、これ以上お母さんに辛い思いをさせたくない、そう思つて私は口を閉じた。

それから、私は真美になつてしまつた。

そう、私は嘘をついたんだ。

お母さんに。

河田くんに。

周りの人みんなに。

そして私は嘘をついたまま、真美と「とかえり」遊びをしたまま、誰にも真実を話すことなく一年を過ごし始める。

「はあー、なんか手紙書きながら思い出しちやつたなあ

何か良さやつない思い付きがあつたはずなんだけど、結局手紙の内容の方はほとんど進んでなんていない。

書き出しの部分は何とかなつたんだけど、肝心の内容が何て書けばいいのかわからない。素直に書いたらきっと混乱するだらうし、かといって長すぎても意味わからなくて疲れるだけだらうし。

あー、どうすればいいのよ、本当に。

それよりも、昔のことを思い出しちやつてこの今私の手紙が書けるかどうかが一番の心配でもあるんだけど。

「あー、やっぱり無理だ」

誰に言われるでもなく、誰に望まれるでもなく、誰のためでもなく、

ただ一滴の涙がルーズリーフの紙に落ちた。

それは私の瞳から、静かに、ゆっくりと、音立てずに落ちていった。

もう泣かないと決めたはずなのに、そう誓つたはずなのに、そんな

ことを決心した自分自身を忘れて私は泣きじゃくつた。

それでも今度は紙には落ちないようにと必死で堪えながら。

拝啓、河田くん。

突然ですが、河田くんには『秘密の基地』がありますか？

私達にはありました。と言つても基地つて言つほど立派じゃなくて、ただ勝手にそうしただけなんですけど。でも確かにありました。一つ言い忘れてました。突然、手紙を出して「ごめんなさい。たぶん、おどりいていると思います。でも、おどろかないでください。今日はどうしても河田くんに言いたいことがあって、でも直接は言えなくて、それで手紙を書くことにしました。ごめんなさい。

さつきの話にもどりますが、私達の秘密基地は神社の裏手です。私達はそこでよく遊んでいました。そこで「とつかえつ」をして帰つていました。

それで、あの日も「とつかえつ」をしたんです。

私とお姉ちゃんを「とつかえつ」したんです。

だから私は真美じやなくて、亞美なんです。死んじやつたのはお姉ちゃんなんです。

たぶん、めちゃくちゃな手紙で混乱するかもしだれませんが本当です。信じてください」とは言つません。ただ、河田くんには本当のことを知つていてもらいたくて、もう誰にも嘘なんかつきたくないんです。ごめんなさい。

それと、ありがとう。

私、嬉しかったです。この前、家に来てくれてお話ししてくれて。本当に嬉しかったです。

ごめんなさい、何を書いていいのかわかりません。もう書くのやめます。

「めんなさい、さつきから何を書いてるのかわかんないです。

今、また泣いちゃいました。

本当にこれで書くのやめます。

河田くん、ありがとうございます。

本当に「めんなさい」。

敬具

八月二十一日 菊池亜美。

秘密基地。

それは私だけの場所。

私自身が落ち着ける、唯一の場所。

私達の、私達だけの、もう一つの居場所。

それ以外にも言い方はたくさんあると思う。プライベートルームだとかマイルームだとか個室だとか、それは人それぞれきっと数多くある筈。

でも私の場合、ううん違う私じゃない、私達の場合だ。その私達二人にとってあの場所は本当に秘密の基地だった。

プライベートルームとかそんな言葉とは違う、私達には確かにあつたんだ。

二人だけの秘密基地が

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8910a/>

---

二人だけの秘密基地。 -We are replaced-

2010年10月8日13時21分発行